

壮大な響き、哀愁に満ちた旋律—

ロシア音楽紀行



2013 6.23_日 開演14:00
香川県県民ホール 大ホール
[アルファあなぶきホール]

高松交響楽団

第110回定期演奏会





指揮 田中 一嘉 Kazuyoshi Tanaka

1953年、東京に生まれる。高校時代、岩城宏之氏の門を叩き、1972年桐朋学園大学音楽部入学。指揮を斎藤秀雄、小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明の各氏に師事。コントラバスを江口朝彦、堤俊作の各氏に師事する。在学中より同大オーケストラ定期演奏会、オペラ公演等を指揮し、森正、ブロードス・アール、河野俊達、フランコ・フェラーラ各氏らの指導を受ける。学外では、日本オペラ協会、長門美保歌劇団、東京アカデミー合唱団指揮者として、数多くのオペラ、合唱曲、特に宗教音楽分野での実績を積む。1976年、大学在学中に、第4回民音指揮者コンクール（現東京国際音楽コンクール）入選、奨励賞受賞。卒業後、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、群馬交響楽団指揮者を歴任。これまでに、日本の主要オーケストラを多数指揮。1992年、ヤナー・チェック春の音楽祭（チェコ・オストラヴァ）にてヨーロッパデビュー。1995年にはカルロビ・ヴァリ交響楽団を指揮。2000年、ドイツ・ロットヴァイル夏の音楽祭。2001年、ベルリン日本週間での公演。2003年、ウィーン・ムジークフェラインザールでの日境合同第九演奏会等、その活動は多岐に及んでいる。1988年より昭和音楽大学講師。



コンサートマスター 福崎至佐子 Hisako Fukuzaki

東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。ヴァイオリンを故 神崎初美、故 巖本眞理、故 岩崎洋三、ボヤン・レチュフ、徳永二男に、室内楽を故 ルイ・グレーラーの各氏に師事。日本フィルハーモニー交響楽団を経て1972年、新日本フィルハーモニー交響楽団アシスタントコンサートマスターに就任。コンサートマスターのルイ・グレーラー氏と弦楽四重奏を組みTV、FM東京、CM、映画音楽、レコーディングに活躍する。1985年、高松に帰郷し、ゴールドブレンドコンサート、四国二期会オペラ、四国学院大学メサイア演奏会などでコンサートマスターをつとめる。現在、高松大学発達科学部教授。香川大学教育学部講師。かがわジュニア・ニューフィルハーモニック・オーケストラ音楽監督。高松交響楽団常任コンサートマスター。新日本フィルハーモニー交響楽団団友。公益社団法人日本演奏連盟会員。日本クラシック音楽コンクール・全四国音楽コンクール・山陽学生音楽コンクール等審査員。平成13年度「香川県教育文化功労者表彰」、第42回「四国新聞文化賞」、平成16年度「香川県文化功労者表彰」受賞、第67回「山陽新聞賞（文化功労）」受賞。平成21年度地域文化功労者文部科学大臣賞受賞。2011年1月、日本クラシック音楽協会第20回優秀指導者賞受賞。

管弦楽 高松交響楽団 Takamatsu Symphony Orchestra



1951（昭和26）年8月、故 緒方益嗣氏が県内の有志を募って創立。同年11月香川県公会堂において第1回定期演奏会を開催し、高松に初めてオーケストラの灯を燈す。爾来、半世紀以上に亘る活動が続け、昨年（2011年）創立60周年を迎えた。100回を超える定期演奏会をはじめ、県内外での特別演奏会、青少年を対象にした音楽教室の実施、香川県県民ホール開館20周年記念オペラ「蝶々夫人」全幕公演（2008年）、サンポートホール高松開館5周年記念「カルミナ・ブラーナ（パレエ付き）」公演（2009年）をはじめ、オペラ・パレエ等の他団体や地元音楽家との共演など地域に深く根ざした幅広い活動を積み重ねている。2001年に迎えた創立50周年を機に新たな半世紀に向けた取り組みとして、高響団員を中心に新たに編成された「コレギウム・ムジクム高松」、「高松オペラシティ・オーケストラ」などの多面的なオーケストラ活動を展開している。さらには2001年より香川県の主催事業となった「かがわジュニア・ニューフィルハーモニック・オーケストラ（KJO）」、2003年1月に設立された「丸亀シティフィルハーモニックオーケストラ（MCO）」への演奏・運営面での全面協力など、地域音楽文化の核ともいえる重要な役割を担う香川のマスター・オーケストラとして様々な取り組みを行っている。1987年、地方文化の発展に大きく貢献した功績から音楽団体として四国で初めての「地域文化功労者表彰」を文部大臣より受賞。2008年、香川県より栄えある第1回「文化芸術選奨」を受賞。現在、オーケストラの団員数は、約150名。

皆様、ようこそお越し下さいました。

110回という区切りとなる今回の定期演奏会では、「ロシア音楽紀行」と題し、ロシアの3人の作曲家の作品の中から、異国情緒とロマンティックなメロディが印象深いハチャトゥリアンのバレエ「スパルタクス」よりアダージョ、前衛的な表現の中にまばゆい色彩の際立つストラヴィンスキーの名作バレエ音楽「火の鳥」、そして、メランコリックな旋律美と力強さを併せ持つチャイコフスキーの大作「交響曲第5番」を演奏します。

指揮者には当団ともすっかりお馴染みとなりました田中一嘉氏をお迎えしました。氏の円熟のタクトのもとで奏でる、ロシア音楽の壮大な響きと哀愁に満ちた旋律を、どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

Program

プログラム

バレエ音楽「スパルタクス」より アダージョ (A.ハチャトゥリアン)

演奏会の冒頭を飾る曲目は、ハチャトゥリアン(1903～1978)の音楽です。彼は、ソ連(当時)の3大巨匠音楽家の1人とも謳われた人物で、大胆かつ強烈な色彩と、豊かな民族色が、彼の作品の魅力です。

さて、この曲は、古代ローマで起こった「スパルタクスの乱」を題材にしたバレエ音楽の中の一編から、主人公スパルタクスとその妻フリーギアが愛を語る場面に使われる音楽です。

曲は、太陽が地平線から少しずつ顔を出して辺りを徐々に照らして行くかの如く優しく静かな調べから始まります。そして徐々に高揚を見せ、美しく優雅な調べが朗々と流れます。一転して決闘するかのような荒々し調べと移り、最後には決闘に勝利し、その喜び満ちた感情を高らかに歌い上げるような、優雅で美しい調べが流れます。そして、曲は再び穏やかな調べへと移り静かに幕を閉じます。

バレエ組曲「火の鳥」【1919年版】(I.ストラヴィンスキー)

「火の鳥」は、ストラヴィンスキー(1882～1971)の名前を世に轟かせた彼の出世作です。ディアギレフ率いるロシアバレエ団のために1910年に作曲されました。ロシアの民謡を取り入れ、華麗なオーケストレーションを施したこの曲は、バレエ共々初演から大成功を収めました。

ストラヴィンスキー自身は、この音楽を、何度か演奏会用組曲として編曲し直していますが、本日演奏するのは、1919年に、標準2管編成のオーケストラ用に編曲したものです。編成が大ききは無いのものの、その分洗練され演奏効果も高い1919年版は現在でも高い人気を誇ります。

「火の鳥」あらすじ…

幸運の鳥とされる「火の鳥」を捕まえようとしていたイワン王子が捕獲に成功するが、火の鳥から懇願され、魔法の羽根と引き換えに逃がしてやる。その後、13人の美しい乙女が現れ、イワン王子は、その内の一人エレナ王女と恋に落ちる。だがエレナ王女をはじめ乙女たちは全員、魔王カスチェイによって捕らわれた身であった。王女達を救おうと立ちあがったイワン王子であったが捕まってしまい、カスチェイの魔法の餌食になろうとしていたその時、魔法の羽によって呼び出された火の鳥が、間一髪魔法をはね返し、それが当たったカスチェイとその手下たちはその影響で踊りだし、疲れて眠ってしまう。火の鳥はカスチェイの魂の入った卵を指し示し、イワン王子がこれを叩き割るとカスチェイ一味は滅び去る。カスチェイによって石に変えられていた騎士達も元に戻り乙女達と結ばれ、イワン王子とエレナ王女も結ばれる。

1. 序奏～火の鳥の踊り 低弦が不気味にうごめく導入部です。弦楽器の特殊奏法が火の鳥の羽音の様なサウンドを作ります。休みなく、次の曲へ続きます。
2. 火の鳥のヴァリアシオン 目の覚めるようなヴィオラの強奏で雰囲気は一変し、木管が細かい動きできらきらと跳ね回ります。
3. 王女たちのロンド(ホロヴォード) 可憐な王女達を表す美しい旋律が、オーボエをはじめ、さまざまな楽器に受け渡されて歌われますが、これはホロヴォードというロシア舞曲に基づくものです。
4. 魔王カスチェイの凶悪な踊り 全ての楽器が限界いっぱいまで総動員され、暴力的ともいえる大迫力のサウンドを響かせます。文字通り「凶悪」な音楽ですが、華麗さも合わせて持っています。
5. 子守歌 火の鳥が、踊り疲れて眠った魔物たちに歌うけだるい子守歌。子守歌はファゴットの独奏が歌います。
6. 終曲 気高く力強い音楽。ホルンの讃美歌風メロディがどんどん高まっていき感動的なエンディングになります。

交響曲第5番 ホ短調 (P.I.チャイコフスキー)

チャイコフスキーは生涯に6曲の交響曲を残していますが、後半の3曲は、自身の苦悩や葛藤を題材にしたと思われる、いわば「私小説」的な一面をもっています。その後半3曲のうち、4番と6番は、「複雑な心の内を吐露した作品」であるのに対して、今回演奏する第5番は「明快に表現した作品」と言えるかも知れません。

その明快さゆえか、初演当時、ひねりの利いた音楽を好む一部の文人筋からは不評だったようですが、そんな小難しいことはお構いなしに、この曲の真価は、聴衆によって明らかにされることになります。ベートーヴェン以来受け継がれてきた、「苦悩を通して歓喜に至る」という交響曲の王道とも言える楽曲構成、そして、その全編に、メロディメーカー・チャイコフスキーにしか書けない美しいメロディを散りばめたこの交響曲は、各地で再演が重ねられ、再演が再演を呼び、たちまち人気交響曲となりました。



P.I.チャイコフスキー
(1840 - 1893)

第1楽章 Andante - Allegro con anima - Molto piu tranquillo

冒頭でクラリネットが陰鬱につぶやくのが、通称“運命のモチーフ”です。このモチーフは、全曲の核を為す楽想としてこの後の全楽章の要所に出てきます。それが終わると、重い足を上げ、歩き出す様に主部に入ります。第1主題は、行進曲調のものですが「前に進みたいのに進めない」という切ない雰囲気も持っています。第2主題は、これぞチャイコフスキーの音楽とでもいうべき、陶酔的な旋律なのですが、全体の雰囲気は、切ない第1主題に支配されています。前に進む足取りもどんどん重くなり、最後はコントラバスの最低音に沈んでしまいます。

第2楽章 Andante cantabile, con alcuna licenza

弦楽器の厳かな導入に引き続いて、ホルン独奏が、哀愁と憧れをたっぷり含んだ主題を歌います。美しいメロディの多いこの交響曲の中でも白眉といえる部分で、その後の甘美なオーボエとのかけあいも聴き物です。この主題はチェロに引き継がれ熱を帯び、より幅広いスケールの、弦楽器によるメロディへと推移します。中間部に入ると、クラリネットやファゴットが淋しく歌いそれを嘲笑うかのように“運命のモチーフ”が出てきます。つづく再現部では、ヴァイオリンがしっかりと主題を奏し、提示部よりもますます感動的で大きな盛り上がりを見せますが、またしても“運命のモチーフ”が悪夢の様に割りこんでてしまいます。主題の余韻が優く鳴り響く中、全てを諦めてしまったかのように、眠りの世界へと落ちていきます。

第3楽章 Valse. Allegro moderato

通常の交響曲では、第3楽章にはスケルツォが置かれますが、チャイコフスキーは、その代わりにワルツを取り入れました。ワルツを得意とするチャイコフスキーならではのアイデアです。夢見るような艶やかさを持つワルツ主題と、中間部での、バレエ音楽を思わせるような小刻みな動きとの対比が見事です。流麗で優美なこの楽章ですが、どこか落ち着かない不安げな気分もつきまとい続け、最後にはとうとう“運命のモチーフ”が出てきてしましますが、それを振り切るように力強い音で楽章を閉じます。

第4楽章 Finale. Andante maestoso

楽章の頭で、いきなり“運命のモチーフ”が奏でられるのですが、本当に同じモチーフかと見まごう程、これまでのそれとは雰囲気が違います。これは何かを暗示しているのでしょうか。ティンパニのトレモロが盛り上がり、主部に入ると、精力的で、闘争心に満ちた第1主題が弦楽器で演奏されます。第2主題は細かいいりずムの刻みの上に乗って、管楽器で流麗に演奏されます。気持ちは高ぶり、“運命のモチーフ”も絡みながら、最高潮に達した所で、オーケストラが全て鳴りやみますが、本当の結末はその後です。どのような結末を迎えるのかお楽しみになさって下さい。

【高響倶楽部法人会員】 ネットヨタ高松

香川県高松市香西南町 404-1
TEL : 087-882-7121 FAX : 087-882-7128
<https://www.happynetz.co.jp/pc/index.php>

各種行事の記録ビデオ制作をはじめ映像情報コンテンツの制作なら

株式会社 よんでんメディアワークス

TEL (087) 818-1071
FAX (087) 818-1072
URL <http://www.ymw.co.jp>
E-mail info@ymw.co.jp



スタインウェイピアノ 香川県正規特約店
有限会社 高松ピアノ工房
ピアノ・オーバーホール・調律・修理・レンタル
■ショールーム/
高松市木太町7区3685 TEL:087-833-6049
■工場/
高松市木太町7区3464 TEL:087-833-9433

楽器堂

GAKKIDO CORPORATION.
ピアノ 管楽器 弦楽器 ギター ベース 打楽器 及び 家庭用電子
オーバース イオンモール高松店 TEL:087-832-8016
音楽教室 英語教室 スタジオレンタル
オーバースクラブ イオンモール高松店 TEL:087-832-8018

音楽、始マル。
いい音楽との出会いを大切にします

www.gakkido.jp



〒761-8012 高松市香西本町1-1 イオンモール高松1F